

## 文法格の起源

Il fait froid. 「寒い」 Il pleut. 「雨が降っている」という表現がある。この場合、「寒い」の言述の主体（これを述べた者）が何者であるかは、文法の範囲外の関心事である。また述語としての「寒い」の主部が何であるか表現されていなくても文としては正しい。

何がどうした、ということが言述の基本要素である。しかし Il pleut. においては、フランス語では pluie 「雨」という語で表わされうる主体が pleuvoir という動詞自体のなかに暗示されているのみである。Il pleut という表現に対し、フランス語では La pluie tombe. （雨が降る）と、「降る」主体をはっきり形式化し、事態を具体的に表現する方法もある。日本語でも「降る」ものは雨とは限らないので、「雨が降る」と格助詞ガを用いて「降る」主体を明示する。古語では、「雨降る」と、ガを必要としない。

文法には「格」 les cas という概念がある。ある文中で、名詞（あるいは名詞的表現）とその他の名詞との関係、あるいは述部に対して果たしている役目のことである。文中の名詞が述部を統べている主語であるのか、述部で示されている行為あるいは状態を蒙っている目的語であるのか、または補語的なものであるかがはっきりしないとその言述の理解はむずかしい。

Pierre, il l'a vu. というフランス語は「ピエールは彼を見た」ということなのかとも知れないし、「彼はピエールを見た」ということなのかとも知れない。またはもしかしたら、「ピエール（呼びかけ）、あいつには知られてしまったよ」というような意味なのかも知れない。どの意味であるかは、文章の正しい文法的理解ではなく、文外のコンテキストによって決まる。

天候や気温、時（間）を表す表現に格の概念はほとんど欠如している。格の表わし方には古代言語では主に格変化、現代語では語順といった方法があるが、その使用はときに無造作であり、格を正確に示すために必要な注意がおろそかであるように見えるのはなぜだろうか。

モノやそれを表す語がいくつか並んだ時、人はふつうその間に因果関係をつけて理解しようとする。前6世紀の歴史家ヘーロドトスの叙述につきのようなものがある。スキュタイ国で窮地にあったペルシャのダレイオス王のもとに、スキュタイの使者から、小鳥に兎に蛙、それに五本の矢が届けられた。この判じ物を「(お前がこのような) 小鳥、兎あるいは蛙 (に変身して逃げないかぎり、われわれの) 矢 (からは逃れられないぞ)」という脅しととったペルシャ王は、全軍を率いて自国に逃げ帰る（『歴史』第四巻）。古人はいくつかの語（モノで表された）に本能的にこのような脈絡をつけたのである。

「猫」「兎」とあれば、これを結ぶ動詞はすぐ想像がついた。「猫（は）兎（をとる）」。「猫」が主体、「兎」が客体（目的格）である。「兎（は）猫（にとられる）」では、主客が逆転するが、こうした受身構文は印欧語では二次的である。しかし「ヒト」がこうした語群に加わった場合は事情が少し異なる。ヒトは客体より主体として文法化される方が印欧語でも日本語でも多い。日本語ではヒトだけが複数のしるしを纏うことができた。「家たち」、「山ら」、「橋ども」、という言い方は存在しない。

さて「虎」「ヒト」と並んだ場合、「虎がヒトを殺す」よりも「ヒトが虎に殺される」というように、ヒトが主体として理解されたのである。名詞の対格形が主格にも用いられるようになってきた中世フランス語で、固有名詞の主格形（英語の Jack, George に対し、フランス語 Jacques, Georges など）が生き延びたのは、こうした心理が永続していたことをあらわすものだろう。

印欧語の格語尾 *-s*（主に単数男性主格）、*-m*（単数対格、あるいは中性主格・対格）、*-i*（与格、あるいは複数主格）は、元は独立した小辞であったと考えられている。日本語のガ、ノ、ニ、ヲ、ヘ、カラというような格助詞は辞として独立しているが、文法的には印欧語と同じく語尾としての機能しかない。主語について述部を特立する役目のハは係助詞とか、副助詞といった分かりにくい範疇に分類されているが、印欧語の観点からすると明らかに格助詞である。ガは主語を特立し、ハは述部にその注意を移す働きをもつ。

印欧語でも日本語でも格をあらわす辞の成立は、名詞と同時期ではなく、その成立後しばらくしてからであると考えられる。万葉集に万葉仮名による助詞表記がない歌群（巻第11「柿本朝臣人麻呂歌集出」と注されているものが目立つ）がある。2513、2514歌の冒頭句「雷神小動」は（ナルカミのシバシトヨミテ）と、「雷神」と「小動」との間に格助詞ノを補って読まれる。助詞が存在したはずの時代のこうした無表記は、助詞が成立的にも文章構成上も日本語では二次的なものであったことを示しているのだろう。ナルカミが主格であることは明らかであるから、表記しなくとも正しく理解されたのである。「雷神」の後に「之（ノ）」が添えられた写本（金沢文庫本）が一例あるが、時代が下った室町時代初期のものである。